株式会社さくら都市綜合研究所
主席研究員
清水秀幸

寄稿

人口減少社会と地方都市の活力再生 ④

3 商業空間の大転換期

前章までは、クルマ社会の到来とともに拡散型都市構造が進行した過程を、法整備の過程を踏まえながら概説し、人口減少社会を迎えるにあたり地方自治体の財政規模に応じた都市のコンパクト化の必要性について述べた。

そして、これからは将来の都市のあるべき方向性を探るうえで、どうしても語っておかなくてはならない近代からの商店街の成り立ちやその衰退の原因、また旧来の商業空間を大きく変えた1980年代辺りからの郊外型商業集積地の誕生等について史実を踏まえて話をすすめていきたい。

4 (1)近代商店街の成り立ちと変遷

それでは、商店街が「滅びる」とはどういうことなのだろうか。その言葉のひびきが持つものは多くの人に日本全体の経済的基盤の沈下を予感させ、また昭和の哀愁を失うことに一沫の寂しさを感じる所にある。

そもそも「商店街」とはなんであるのか？私達は商店街そのものをあまり考察することなく、いきなりその衰退原因を求めてしまい、商店街の内側から探ってみようとしない。いろいろな文献を調べてみると、旧来の商店街論はその起源を京文化、平安京に求めているものが多いが、現在の「商店街」の形を成すものは意外とその歴史は浅く、20世紀初頭辺りに辿りつく。

第一次大戦後、日本は空前の不景気にさらされ、経済的に苦しむ農民の中には田畑に見切りをつけ、都会へと移動する人が増え始めた。

しかし、都会に移り来た農民を吸収するほど不景気の下で雇用もなく、離農者の多くは資本をそれほど要しない「零細小売業者」として働き始め、それら小売業者が後の商店街を形成していくのである。「商店街」とは、このような20世紀初頭の都市化と流動化を背景に、新しい形として自然発生的に〝発明〟されたものではないか。

長野市においては権堂町周辺がそれにあたる。

そして1960年代に入り、戦後国土の復興から高度成長期を迎える過程で地方都市にも「百貨店（デパート）」が出現したことで零細小売業の多くは存亡の危機に直面することになる。百貨店は各売場に町の零細小売業では実現できないような専門性を打ち出し、それを高密度に集約することで、消費の利便性を図った。

その圧倒的大資本を以って物量を並べる百貨店に対し、零細小売業者はのきなみ圧迫される訳であるが、やがてそれに対抗すべく結束して策を講じるようになる。

さまざまな小売スペースを大きな箱（ビル）に集約し「縦」に積み重ねた百貨店方式に対し、彼らは店同士が「横」に連携して専門色を打ち出すスタイルを編み出し、さらにアーケードを整備し、共通したデザイン性を持つ街灯や街路樹を配して現在の商店街スタイルを形成するに至ったのである。

そしてそれらが形成された頃は、奇しくも戦後の高度成長期にリンクして「サラリーマン社会」が形成され、1億総中流意識がもたらされた時代であり、農村部から出所し、都市自営業者として安定した生活基盤をなした商店主自身にも中流意識がもたらされ、その商店主（家長）を中心とした「近代家族」により商店街が支えられた時代の到来でもあった。

しかし、それがのちの商店街の凋落を決定づける大きな要因となった。

（続く）

清水　秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒、同年守谷商会入社、2006年6月取締役就任。各支店長、営業本部長を経て、退任。13年7月にさくら都市綜合研究所を設立し、現在社長。